大雪山国立公園指定前・指定時に関する資料

1　指定前・指定時の評価

参考文献 および 発行年	執筆	引用文（評価に関する記述）	キーワード	
			自然環境	利用
國立公園 第四巻第四号 昭和7年	北海道庁 林務課	此邊は高山植物帯で寒生の植物が群生してゐるが火山の新舊によつて其種類を異にしてゐる、此地帯こそは御花畑として人々の最も渇仰する所であるが本景勝地に於ては融雪の時期遅く降雪早きを以て花開き実結ぶ期間甚だ短かいけれども各種の植物の花と実を同時に見得る事は本高山植物帯の一の特徴と云つて宜しい、…	植物	観察
國立公園 第五巻第三号 昭和8年	栃内吉彦	大火口原を雲の平と呼び、満目ハナゴケの大群落と各種の高山植物を以て飾られて居る。其の豊富な事と、群落の著大なる點に於ては、海内大雪山の右に出づるものはなく、お花畑の美観はこの雲の平に極まるといへやう。		
國立公園 第六巻第十一号 昭和9年	田中館秀三	大雪山國立公園は無人の秘境である部分多く、阿寒の世人に親しみあるに比して今日の処大衆性は狭いが、大地域に漲る原始性、特に一望十数萬町歩を被覆するトド、エゾの大森林景観は言語に絶するものがあり、之れが開発は最も慎重を要する、神の秘境に踏み込む敬虔なる態度でありたい。		
國立公園 第四巻第四号 昭和7年	北海道庁 林務課	北海道に有名な熊の分布も此の中央山脈が最も彼等の棲家になつているが此の熊の為に危害を受けたといふ事を聞かない、蓋し本山脈に棲んでゐる熊は餘り人間からの恐ろしさを感じて居らない為人間に對する態度が至つて温しいものである様に思ふ、イエローストーン國立公園の熊がよく人に馴れてゐるといふ事を聞くが此の熊も方法によつては馴致の望がないものでもない。	動物	観察
國立公園 第四巻第四号 昭和7年	北海道庁 林務課	…尚本景勝地中に特記すべきはナキウサギの棲息してゐる事である、此のナキウサギは数年前までは本道並びに日本内地には其棲息してゐる事は判然しなかつたが偶然のことから発見され其記録が発表さるゝ事となつた、此の動物は世界でも其分布が少くヒマラヤ山脈や蒙古、カムチャツカ、北アメリカ等で此の同族のものゝ中には化石となつているものもあるので如何に原始的な古い動物であるかゞ想像される。…		
國立公園 第四巻第四号 昭和7年	北海道庁 林務課	…其他高山蝶として大雪山特有のダイセツタカネヒカゲ、アサヒヘウモン、ウスバキテウ等が産する、大雪山景勝地が如何に珍奇な動物に富み又其種類も多く本道の動物保護繁殖地帯として欠く事の出来ない地域である。		
國立公園 第四巻第四号 昭和7年	北海道庁 林務課	本景勝地は其緯度北に偏し標高二，000米内外の高度を保つてゐるので寒生植物の群落を有する點では我國に於ても誇るべきものがある、山上は丁度アラスカか、カムチャツカの植物景観に似た所が多々あるのみならず北海道に於ける特有の高山植物を多種多様に集めてゐるので植物学上非常に参考になる地域である。	地理	眺望
國立公園 第五巻第十号 昭和8年	黒田生	然別湖道路の扇ヶ原より十勝平野の展望は狩勝峠の比にあらずと言はれてゐるが、更に東西ヌプカウシ山或は白雲岳、天望山に登ればこの平原の廣袤は更に開けて眞に雄大なるものとなる。自動車道路より望むカシハ樹林はこの展望の前景に當るを以て一木と雖伐採せざるやう、また開墾も中止するやうに努めたいものである。		
國立公園 第五巻第三号 昭和8年	栃内吉彦	十勝岳西面の中腹約千米の地點に吹上温泉がある。こゝは針葉樹と白樺の密林の底に靜もる閑寂境で、十勝連峯の山々に登る絶好の根據地である。特に冬期スキー地としては、雪質絶好で、スロープの変化に富み、登山としての興味も豊かであるといふやうな點から、本邦随一と称せられる。	地理	スキー

参考文献 および 発行年	執筆	引用文（評価に関する記述）	キーワード	
			自然環境	利用
國立公園 第六巻第五号 昭和9年	千家哲麿	日本アルプス一帯は実に素晴らしいスキーゲレンデを持つてゐるが入り難く、然も一部を除く外特殊技術家に限られる缺點があるが、大雪山、十勝岳は交通に恵まれ、然もその山々はピツケルを振ふ冬季登山と云ふよりはスキー登山の対照となつて居り特殊技術を要求することなく一般向きである。スキー場としての優秀なる素質と適當なる根拠地を持ち、然も比較的交通に恵まれた十勝岳、大雪山の一帯が「冬は大雪山國立公園へ」の標語と共に施設をとゝのへ内地からの遠征者をも多数迎へて眞に冬の國立公園として一層発展するのも遠いことではないことゝ思ふ。	地理	スキー
國立公園 第五巻第三号 昭和8年	栃内吉彦	此の大地域一圓は、山岳、渓谷、湖沼の交錯総合する処であつて、それを彩るに原始林と高山植物を以てし、あらゆる内陸天然美の渾然たる大調和を現はしてゐる。春夏は花に、或は青葉に飾られ、秋は紅葉の錦繍に彩られ、山に、谷に、極まるところなき絶景奇勝を探る可く、冬は又、林間の白雪にスキーを飛ばすもよく、常住の吹雪に明け暮れする尾根の蒼氷に、クランポンを踏みしめ、ピツケルを振ふもよく、四季の興趣は其の盡くるところを知らない。加ふるに當地帯至る処温泉湧出に恵まれ、山峡都塵を絶ちたるあたりに、悠々塵勞を醫すことも出来る。	地理	四季を楽しむ
國立公園 第五巻第三号 昭和8年	栃内吉彦	然別沼は、處女林にかこまれた山間の幽湖であつて、湖畔に聳ゆるペトウトル山（一三四〇米）の翠影を宿し、尺餘の岩魚を水晶の水に泳がせ、春の若葉秋の紅葉の眺は比ぶ可くもない。加ふるにこゝも湖畔に温泉の湧出がある、この然別沼を以て大雪山國立公園地帯の南端とする。	地理	その他
國立公園 第五巻第十号 昭和8年	黒田生	現今は交通不便の為めその探勝は困難とされてゐるが、十勝川上流と然別川の古生層に穿たれたる峡谷は森林の美と諸処に湧出する温泉と共に今後の探勝道路の開鑿によつてはこれ等の峡谷を探るのも興味あるものとならう。		
國立公園 第四巻第四号 昭和7年	北海道庁 林務課	…一度これらの峯頭に立たんか全道を下瞰し得てその眺望の絶佳なることよく筆舌の及ぶ所に非ず、雲煙模糊の間に利尻富士を眺め日本海は渺茫として水天彷彿し遙に雌阿寒、雄阿寒の諸峯を望み身は迢化の神園に在つて自然創造の神秘を満喫することが出来る。	景観	眺望
國立公園 第四巻第四号 昭和7年	北海道庁 林務課	層雲峡は又靈川碧水峡とも云つて大雪山彙の北方屏風岳とニセイカウシュペ山との連峯の間に在つて石狩川を挟んでゐる、摩天の大絶壁はこれ柱状節理を示せる流紋岩で、見上ぐれば白雲去来するかと思はるゝばかり奇峰奇岩簇立連互し懸るに大小多数の淙々たる水晶簾を以てし恰も仙女の薄絹を纏ふて天空に舞ふに似てゐる、而も之等の絶壁は頂にトドマツ、エゾマツ、ヤマザクラ、ツツヂ、ナナカマド、カヘデ等を以てするが故に春秋の眺又絶佳である、…		
國立公園 第四巻第四号 昭和7年	北海道庁 林務課	勝仙峡は忠別川の上流で美瑛、忠別の東端燕岩の絶壁より起り松山温泉の上流十数町の箇所に至つている、此所も層雲峡と同様流紋岩の柱状節理の絶壁で懸崖の荘厳と飛瀑の美麗とは層雲峡に比し弟たり難く兄たり難き絶景である。		
國立公園 第四巻第四号 昭和7年	北海道庁 林務課	羽衣の瀧の如きは北海道第一の大瀑布で遠く望めば天女が天降る時白沙の羽衣を飜へすが如く近く眺むれば瀑水麗々柳枝の雪を帯びて舞ふが如しと稱されてゐるが一度此の瀑を見たならば大自然造化の妙に驚かざるを得ない。		
國立公園 第五巻第十号 昭和8年	黒田生	…、山岳の美に比肩して、渓谷としては層雲峡勝仙峡の流紋岩が柱状節理の懸崖をなし、更にそれに懸る瀑布の奇觀は峡谷を訪れ温泉に浴する探勝者を感動せしむるものである。		

参考文献 および 発行年	執筆	引用文（評価に関する記述）	キーワード	
			自然環境	利用
國立公園 第五巻第十号 昭和8年	黒田生	石狩川を隔てゝ大雪山と相対峙するニセイカウシュペ山は現在の登山道路にては登山の興味は削減されてゐるが、山頂一帯の高山植物は可成豊富で、これより大雪山系を望む山岳眺望美は素晴らしいものである。	景観	眺望
國立公園 第六巻第十一号 昭和9年	田中館秀三	原始林の中の景観は層雲峡に沿ふ自動車道に、又十勝岳吹上温泉に登山する新道に、その幽邃なる趣を味ふことが出来る。高山の大観はこれを旭嶽の頂上に選ぶ。北は近くニセカウシュツペ山に連つて居るが、西は遠く日本海岸の雪班なる暑寒別岳、南十勝連峯の果てに墨繪の如く姿を雲上に浮べる日高山脈、近く蝙蝠の翼を張れる如き石狩岳山稜等を指呼し、遠く北見富士の整然たる姿、オコツク海に臨む斜里嶽の鋸歯を雲間に眺め、雄阿寒雌阿寒の神の如き山々を遠望する。実にこれ北海の大自然を一點にあつめる。		
國立公園 第四巻第四号 昭和7年	北海道庁 林務課	…沼の原は石狩山脈とトムラウシ山彙との間に在る盆地で高度千四百米内外で石狩川と十勝川の分水嶺の近い所に在る、此所に散在してゐる沼は大して大きくはないが、それでも直径二粁に及ぶものもある。此辺一帯は高山性の矮性になつたエゾマツが生えて居つて高山植物が豊富である、実に本箇所は幽邃な箇所で一度足を運べば恰も大自然の静寂な懐に抱かれた様な感が起る。	生態系	観察
國立公園 第五巻第三号 昭和8年	栃内吉彦	又此の地域一帯は、動植物地質鉱物等学術上の、貴重なる研究資料の豊富なる処であつて、従来も各種の研究機関から派遣される自然科学々究の徒が、好乎の活躍の天地であつた。もし夫れ國立公園の設計に當つて、之に高山植物園とか、生物或は地質の研究所といふやうな、何等かの学術研究施設が加へらるゝならば、國立公園は、単に観光遊覧の地たるに止まらず、又学術研究上貢献する処も多大なる可く、こゝに於て國立公園設定の意義は、一層擴大せられ且つ深められる事と思ふのである。	生態系	その他
國立公園 第六巻第十一号 昭和9年	田中館秀三	日本の國立公園の美は饒かな人文と繊細な自然が調和した処に醸成されるものが最も多く、また最も日本的であると思ふ、廣大なる原始區域を含む北海道の國立公園計画に當つても原始景観地域に特に考慮が拂はれるは勿論、上記の點をも充分攻究し特徴ある北海道の國立公園として生したい。	その他	その他
國立公園 第六巻第十一号 昭和9年	田中館秀三	…、何分本地帯は陸地測量部の所謂日本に於ける四大難所の一で大正十年に初めて測量を実施した地丈に人跡未踏の箇所多く登山も從つて特殊学究者に限られてゐた状態である。大正十年國立公園の候補地として全國の勝景地十六候補の決定された際には大雪山は旭岳と称し世に知られず層雲峡の名は未だ生まれなかつた。		
國立公園 第六巻第十一号 昭和9年	田中館秀三	…。将来の希望として私は本國立公園の中心地層雲峡に之等の歴史との諸資料を網羅した博物館の設置、現在の小函迄の自動車道を北見オンネ湯に連絡すると共に遠く然別湖迄延長する事、大雪山頂の廻遊自動車道の開鑿、大噴火口の温泉を開発し高山ホテルの建設と山上夏スキーの奨励施設、層雲峡口よりニセイカウシウペ山頂に至る登山道の開鑿、士幌線を上川驛に連絡せしめ観光鐵道の実現、層雲峡温泉開発功労者のための理解と助力をこう與へられんことを望むものである。		
太田龍太郎の生涯 2004年12月	笹川良江　編	明治四十四年の帝国議会で日光や富士山の公園化が議論されている頃、北海道でも国立公園運動をすすめた先覚者がいる。それは愛別村村長太田龍太郎である太田村長は明治四十三年、当時まだ世に知られていなかった石狩川上流（現在の層雲峡付近）に探検的紀行を試み、その自然景観の素晴らしさに驚き、すっかり魅せられてしまった。 そこで「霊山碧水」と題して、石狩川上流の自然美と将来性を北海タイムスに寄稿したところ、がぜん世間から注目されるところとなり「此の地方土地払下運動猛烈となり、所謂(いわゆる)政商富豪其他相(あい)競(きそ)うて狂奔(きょうほん)飛躍以て占有せんとする実況」となってきた。		

〈参考〉大雪山国立公園指定までの歩み

昭和戦前に指定された日本の国立公園は、一二公園であるが、大雪山以外の一一公園は、すでに大正時代に内務省が選定した「一六候補地」に入っていた。ところが当時の大雪山はまだ世に知られぬ新顔の登場で、しかも面積が約二三万ヘクタールと日本最大規模を誇る、原始性の豊かな国立公園だった。ほとんど無名の景勝地が、東京都全域よりも広い面積で、ほんの短期間のうちに国立公園となってしまったのは、いかにも北海道らしい話である。

○　大雪山が世に知られるまで

北海道の先住民族アイヌは、大雪山のことをヌタプカウシペ（川の曲がり目の陸地にいつもいるもの）と呼び、その尾根の先がカムイ・ミンタル（神々の遊ぶ庭）だったという。この「いつもいるもの」と「神」はヒグマを指すとされている。

その大雪山には幕末から明治にかけ、何人かの先人が探検的な足跡を残しているが、世間によく知られるようになったのは、大正後半以降である。

そのころ北海道内では羊蹄山をはじめ、いくつかの山で登山が一般化していた。この傾向を敏感に感じとった北海道庁では大正一二年に「北海道山岳会」を結成し、登山趣味の普及を図った。また道路課の肝いりで到達道路や登山道の改修、山小屋（石室）の整備を行い、大雪山は、登山会、夏期大学、登山道改修、石室整備の主な対象地となった。

そして大正一三年には「大雪山調査会」が結成され、大雪山の調査や紹介事業を始めた。

○　国立公園候補地に滑り込み

昭和五年、内務省に国立公園調査会ができ、翌六年に国立公園法が成立し、いよいよ候補地が「一六候補地」からノミネートされたが、大雪山はその「一六候補地」に入っていなかった。

この状況下にあって、昭和六年に北海道庁拓殖部が作成した『北海道ニ於ケル国立公園候補地調査概要』には、阿寒、登別、大沼の三候補地の他に「大雪山ノ景観」が特別に付記されていた。

ただし、北海道庁が想定した大雪山国立公園の範囲は、旭岳、黒岳など石狩川流域の約七万五、〇〇〇ヘクタールで、然別湖やニペソツ山など十勝川と音更川の流域は入っていなかった。

このことを知った帯広の林豊州（十勝毎日新聞社長）は、昭和六年八月の国立公園委員会の調査に途中同行し、十勝側の編入を訴えた。

その熱意が実り、内務省では後日に十勝側の調査を行い、大雪山国立公園候補地は一気に一三万ヘクタールも拡大し、二〇万ヘクタール規模となった。

こうして大雪山は昭和七年一〇月、一六候補地以外では唯一の正式な候補地となり、九年一二月、国立公園として指定されたのである。

（「国立公園」６２８号より抜粋）